

2013年3月11日・福島民友「特集・東日本大震災2年」では

「言葉で残す」使命感

福島の詩人 二階堂^{てる}晃子さん

私は信じる／子どもたちの柔らかさを／試練の数だけ優しさは深さを増して／揺れた分だけ感受性がときめく
／危機の中で知ったいのちのほんとうの重み／凍土の下から芽吹く確かな息吹き／そして願おう／世界中の
人々に／福島の子供が特別視されないことを／譲れない夢と誇りに／誰よりも満ちているから
(「見えない声」より抜粋)

原発事故がなければ助けられただろう尊い命、助けを求める声に背を向け避難を余儀なくされた救助隊員の
苦しみ――。今なお拭い切れない悔しさや悲しさを、県現代詩人会員で福島市の二階堂晃子さん(69)は言葉
にした。「悲しみをそのままにしては力にならない。書き残すことで生きる力を持っていきたい」

2月に詩集『悲しみの向こうに一故郷・双葉町を奪われて』を出版した。実家は、福島第一原発から約3.5
キロにある双葉町^{もろたけ}両竹。海から約1キロの実家は津波に流され、義兄は車ごと津波にのまれながら九死に一生
を得た。二階堂さんを頼って避難した姉一家から聞いた生々しい震災の記憶。一時帰宅では、18歳まで過
した古里の絶望的な光景に胸がつぶれた。

二階堂さんが住む福島市渡利も、局所的に放射線量が比較的高い「ホットスポット」。住民が放射線への不
安を抱えながら生活する原発事故の被災地。自宅には作業服姿の見知らぬ人が「サンプル取りです」と事務的
に線量を測りに来た。

「人間の尊厳を守りたいために書いたのかもしれない」。浜通りと中通り。形は違うが、二つの震災を間近に
した二階堂さん。「現実を言語で残す。福島も双葉も分かる私がやらないと」と使命感に駆られる。

出版から約一ヵ月。二階堂さんの元には100通近い激励の手紙が届いている。「私の言葉を受け止めてくれ
る人がたくさんいる」。前を向く力となった。最近詠んだ詩は「まちをつくろう」。見知った人々の歩く町並み
を思い描き、ばらばらになった「双葉町、の一刻も早い再生の願いを詩に託した。

と紹介されています。